ウェスパシアヌス帝の東方政策

――ローマ帝国の再建と最盛への礎――

桑山由文

【要約】紀元一世紀後半のウェスパシアヌス帝治世は、従来、ローマ帝国西部が発展した時代と考えられてきた。だが、この時代、大きく外観を変えたのは東方辺境であった。本稿では、ローマ＝パルティア関係と属州カッパドキア＝ガラティアの成立過程との二点からこの時代の東方辺境政策の実体を考察した。その結果、この政策には、先行研究が重視したような、パルティアに対抗しての軍備増強という対外的、軍事的要素は小さく、内乱で疲弊した財政の再建という経済的、内政的側面が強かったことが明らかになった。単なる辺境政策ではなく、帝国東部全体の再編策の一環だったのである。さらに、東部再編が現地出身者の登用を促進したことは、東部上層家系が中央政界へ進出し、後のドミティアヌス帝期、さらには五賢帝期に元老院議員身分内で一大政治勢力を成す契機となった。ウェスパシアヌス帝の東方政策は、帝国東部を東方属州として地域的にまとまらせ、五賢帝期の最盛を支える礎を築いたのである。

史林　八一巻六号　一九九八年一一月

はじめに

ローマ元首政初代のアウグストゥス帝以来続いていたユリウス・クラウディウス朝はネロ帝の死により滅亡し、紀元六九年に帝国は一年に四人もの皇帝が立つ内乱状態に陥った。俗に「四皇帝の年」とも呼ばれるこの六九年の内乱に勝利してフラウィウス朝（六九～九六年）を開いたのが、ウェスパシアヌス帝（位 六九～七九年）である。前王朝の諸皇帝とは異

なって実力で帝位についた彼の統治は、元首政に変革をもたらし、二世紀ローマ帝国の最盛の礎を築いた画期であった。従来の研究では、このウェスパシアヌス治世を、帝国の西部属州の発展期とみなしてきた。帝が西方出身の人間を多く元老院議員へ上げ、彼らの子孫から二世紀の五賢帝期に皇帝となる人物が現れたこと、ヒスパニア（スペイン）の全都市にラテン権が賦与されたことなどが重視されてきた。その一方で、帝国東部に関して彼は冷淡な態度で臨んだ、と考えられ、彼の東部政策は軽視されている。[1]

ところが、この時代には、帝国東部で大きな変化が起こった。属国の併合、小アジア東部への軍団駐屯などが行われ、東方辺境が再編されたのである。従来、こうした東方辺境再編は国境防衛体制を強化しただけのものとみなされてきた。帝国東部に対する政策がローマ帝国全体の動向に密接に関わっていたとは考えられてこなかったのである。

しかし、ウェスパシアヌス帝は帝国東部を支持基盤として六九年の内乱に勝利した人物であった。これが、彼の政治に何らかの影響を与えたことは確かである。治世後半には属国ユダヤの女王ベレニケが首都ローマで、かなりの影響力をふるったらしい。彼女は六九年の内乱でウェスパシアヌスに重要な支援を与えた人物で、帝の長男で後の皇帝ティトゥスの愛人であった。帝国統治にあたって、ウェスパシアヌス帝が帝国東部に対して何らの配慮も示さなかったとは考えられない。

本稿は、以上の視点に立ち、ウェスパシアヌス帝の東方辺境再編を分析し、それを手がかりとして、ウェスパシアヌス帝期における帝国東部[2]の意義を考察する。

ウェスパシアヌス帝期には、東方辺境において以下のような出来事が起こった。第一に、ローマとパルティアの間にあった属国コンマゲネ王国（現在のトルコ東南部に位置）がローマに併合された。第二に、小アジアの東部にあった属州カッパドキアと中部にあった属州ガラティアが合併されて属州カッパドキア＝ガラティアとなり、二個の正規軍団が派遣された。さらに属州カッパドキアの東にあった属国小アルメニア[3]も併合された。これらの東方辺境再編の結果、ローマはユーフラ

テス川以西を完全に支配下におくこととなった（地図参照）。

こうしたウェスパシアヌス帝の東方辺境再編は、従来の研究では、東方のパルティアなどの外敵に対して国境防衛体制を強化するために行われた、と考えられてきた。[4] この説によれば、東方辺境再編には以下のような理由があった。ローマとパルティアがアルメニア王位をめぐって争ったネロ帝期のアルメニア戦争（五四～六三年）の結果、パルティア王ウォロガエススの弟ティリダテスがアルメニアの王位についた。アルメニアがパルティアの影響下に入ったことは、ローマにとって非常な脅威であった。というのも、それまで小アジアには正規軍団が駐留せず、属州シリアの軍団のみが東方の防衛にあたっており、国境防衛体制は不十分だったからである。そのため、ウェスパシアヌス帝は、パルティアとアルメニアの脅威に対抗する意図から属州カッパドキア＝ガラティアに二個軍団を派遣し、さらに、戦略的に重要であったコンマゲネ王国を併合して軍団を置き、国境線の防備を固めた、というのである。[5]

それに対して、近年、東方辺境政策はむしろ攻撃的性格を持っていたという積極説も強く唱えられてきた。辺境の軍団は東方への積極的拡大を意図して駐屯させられた、というのである。この説によれば、ウェスパシアヌス帝の東方辺境政策も他の時代のそれと同様であった。属州カッパドキア＝ガラティアへの軍団駐屯は将来のアルメニア併合を念頭においたものであり、コンマゲネ王国併合もパルティアの侵攻に備えるためではなく、むしろパルティアに対する領土的野心の現われであった。二世紀初頭にはトラヤヌス帝がパルティア戦争を起こしてアルメニアを併合し、メソポタミア地方までを一旦征服したのであるが、ウェスパシアヌス帝の東方辺境再編はパルティア戦争の前段階であった、という。[6]

しかしながら、どちらの立場にも問題は多いように思われる。東方辺境政策に防衛的性格をみる前者は、パルティアからの侵略の可能性を強調するが、近年の研究によれば、ローマ＝パルティア間の戦争は、基本的に前者が後者に干渉したことがきっかけで始まったのである。[7] 一方、攻撃的性格をみる後者は、あらゆる時代においてローマがパルティア、アルメニアへの領土的野心から行動した、と捉える。しかし、これは各々の時代が置かれた状況をあまりに無視しているとい

えよう。

また、どちらの説も、ウェスパシアヌス帝の東方辺境再編を、対外関係のみから考察しようとし、当時のローマ国内の情勢をほとんど顧慮していない。だが、ウェスパシアヌス帝治世を考察する場合、特に国内情勢を念頭に置く必要がある。彼の治世は六九年の内乱の直後で、帝国の秩序は安定していたとは言い難いからである。加えて、帝国東部はウェスパシアヌス帝が内乱において支持基盤とした土地であり、きわめて早くから帝の支配下に置かれていた。したがって、帝の東方辺境再編を、同時代の状況との連関から考察する視点は欠かせない。本稿は、ウェスパシアヌス帝の東方辺境再編を対外的視点と国内的視点の双方から考察する。東方辺境再編がウェスパシアヌス帝の帝国統治に大きな意義を持っていたことはそこから明らかになろう。

① R. Alston, *Aspects of Roman History*, London, 1998, pp. 173-175 では、ゲルマニア、ブリタンニアに叙述の中心が置かれ、帝国東部についてはコンマゲネ併合に簡単に触れる程度である。R. Syme, Greeks Invading the Roman Government, *Roman Papers*, IV, Oxford, 1988, p. 12. もフラウィウス朝成立で主として西方が恩恵に浴した、とする。

② 本稿において、帝国東部とは、ギリシア、エジプト以東を指す。

③ 小アルメニアはアルメニア王国（現在のトルコ・イラン国境付近）の西にあり、アルメニア王国の一部ではない。本稿ではアルメニアといった場合、全てアルメニア王国を指す。

④ パルティアはセレウコス朝から独立してイラン地方を中心に勢力を誇った国。ローマ帝国近隣では最大の外国勢力で、しばしばローマと争った。

⑤ R. Syme, Flavian Wars and Frontiers, *CAH*, 11, 1936, pp. 137-145; D. Magie, *Roman Rule in Asia Minor*, 2 vols., Princeton, 1950; G.W. Bowersock, Syria under Vespasian, *JRS*, 63, 1973, pp. 133-140; T. B. Mitford, Cappadocia and Armenia Minor, *ANRW*, II, 7-2, 1980, pp. 1170-1228.（以後、T.B. Mitford, Cappadocia と略す。）

⑥ ソの立場には、A.B. Bosworth, Vespasian's Reorganization of the North-East Frontier, *Antichton*, 10, 1976, 63-78; B. Isaac, *The Limits of Empire*, Oxford, revised ed., 1992. など。E, Dabrowa, The Frontier in Syria in the First Century, AD, *The Defence of the Roman and Byzantine East*, ed. P. Freeman and D. Kennedy, vol. 1., BAR, 297, 1986, pp. 93-108. は、防衛的性格を前提としつつ拡大策としての側面も重視する折衷的態度。

⑦ 例えば、T. Cornell, The end of Roman imperial expansion, *War and Society in the Roman World*, ed. J. Rich & G. Shipley, 1993, London and New York, p. 144f.

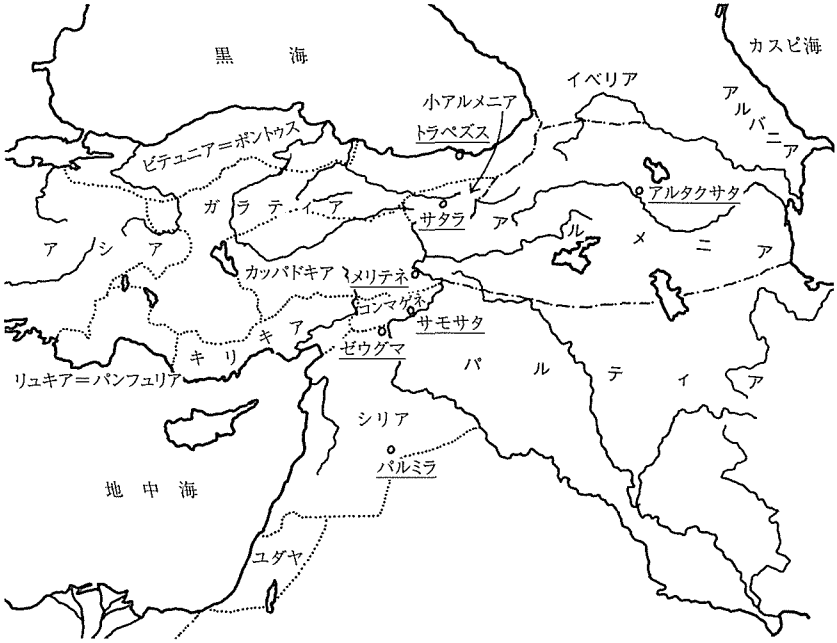
第一章　コンマゲネ王国併合とウェスパシアヌス帝の対パルティア政策

第一節　コンマゲネ王国併合をめぐるローマ＝パルティア関係

東方辺境再編は、パルティアとの関係を中心に論じられてきた。その焦点の一つは、コンマゲネ王国の併合である。本章では、この事件の分析を中心として、ウェスパシアヌス帝期のローマ＝パルティア関係を考察する。

コンマゲネ王国はローマの属国であったが、七二年突然のローマ軍の侵入を受けて併合された。同時代のユダヤ人歴史家ヨセフスは、コンマゲネがパルティアと通謀した疑いから、このような事態が起こったと記している。[①] だが、この併合理由については、従来からその信憑性が問題とされてきた。というのも、コンマゲネ王アンティオコス四世は、ローマの侵入に対して一切抵抗せずに捕らえられ、ローマに送られてウェスパシアヌス帝から厚く遇されている。子孫はローマの最高公職であるコンスルにまで到達しており、パルティアとの密通が併合の口実にすぎなかったことは明らかなのである。概して、この事件について先行研究ではローマの軍事意図が強調されてきた。コンマゲネ王国は属州カッパドキアと属州シリアの間に位置し、その都サモサタはユーフラテス川の渡河点であった（地図参照）。Dabrowa らはこの点を重視し、ローマが、ユーフラテス川に沿って軍団を置くことで、カッパドキアからシリアにいたる対パルティア防衛ライン（リメス）の構築を目的とした、とみなした。[②] Isaac は、サモサタへの軍団駐屯で、パルティアに対する軍事行動を容易にすることをローマは意図した、という。[③] 彼らの主張は、ネロ帝期のアルメニア戦争以来ローマ＝パルティア関係が穏やかならざるものであったという認識に基づいており、コンマゲネ併合により両国関係はさらに悪化した、とみる。

だが、当時の両国関係を良好と示唆する史料は多い一方で、険悪とみなすことはきわめて根拠に乏しい。確かに、アルメニア戦争の結果、アルメニア王位はパルティア王の弟ティリダテスのものとなったが、同時にアルメニア王国に対する



ウェスパシアヌス帝期のローマ帝国東部

ローマの宗主権も認められたのである。④以後、ローマとパルティアは一種の同盟関係にあったらしく、ネロの死後も、おそらくウェスパシアヌス帝期にパルティア王ウォロガエススは関係更新にローマへ使節を派遣したらしい。⑤六九年の内乱においてもパルティア王ウォロガエススはウェスパシアヌス帝に四万の兵の提供を申し出た。⑥歴史家タキトゥスは、パルティアをウェスパシアヌスの同盟者の一つに数えている。⑦また、コンマゲネ併合の直前、ユダヤ戦争後にパルティアの使者はウェスパシアヌスの長男でユダヤ戦争の司令官であったティトゥスへ金の冠を届けて歓待されている。⑧併合後も両国関係は良好であったらしく、ローマの侵攻後パルティアに亡命したアンティオコス四世の息子たちはウォロガエスス王の仲介でローマへの帰還を許された。⑨コンマゲネ併合の三年後の七五年には、ウォロガエスス王はアラニ人の侵攻を受け、ウェスパシアヌス帝に援軍要請をしてもいる。⑩パルティア側に、コンマゲネ併合などのローマの拡大に対する警戒心があったとは思えないのである。

さらに、サモサタへの軍団駐屯がウェスパシアヌス帝期を最初とする確実な証拠は今のところ存在しない。[11] ユーフラテス西岸のゼウグマには第四スキュティカ軍団が駐留していたらしいが、これはネロ帝期からであり、ウェスパシアヌス帝の政策に帰すことはできない。[12] カッパドキアへの軍団駐留も必ずしもパルティアを念頭に置いたものではなく、Dabrowaらが言う防衛ラインがウェスパシアヌス帝期初期に専ら構築されたとは言い難いのである。[13] もちろん、サモサタは戦略的に重要な位置にあった。しかし、ユーフラテス川以西は、初代アウグストゥス帝以来ローマの支配領域であり、パルティアとの争いの種となったことはない。パルティアがローマの干渉を感じて反発したのは、ユーフラテス川をローマ軍が越えた時であり、ユーフラテス川以西をパルティアはローマの領土と黙認していたようである。[14] コンマゲネ併合はユーフラテス川以西におけるローマの支配を完全にしたであろうが、そこにパルティアとの利害の衝突を読み取る必要はない。そもそも、当時のコンマゲネ王国は、属国とはいっても、ローマと外国勢力の緩衝国ではなかった。コンマゲネ王国の領域は、かつてティベリウス帝治世にローマに併合されて属州シリアに組み込まれた。ガイウス帝はこの地を王国に戻したものの、治世末期に再び併合した。その後、クラウディウス帝が王国とし、ウェスパシアヌス帝期に至っていたのであった。この国は名目上王国でも、実質的にはローマ帝国の完全な支配下にあったのである。アルメニア戦争でもコンマゲネは一貫してローマの同盟者として行動し、パルティアとの関係は知られていない。ウェスパシアヌス帝がわざわざ軍団を送り込んだのは、この王国が当時それなりに軍事力を有し、例えば、六九年の内乱やユダヤ戦争である程度の働きを示したからであると思われる。[15] いわば、コンマゲネ王国の併合はローマの国内政策の一つにすぎず、パルティアを刺激するような性格のものではなかった。

このようにみてくると、コンマゲネ併合にもかかわらず、ローマ＝パルティア関係がウェスパシアヌス帝即位の六九年と比べて悪化した兆候はみられない。控えめに見ても、六九年から七五年頃にかけてのウェスパシアヌス帝期前半にローマがパルティアに対して戦略的意図を持って東方辺境再編を進めた、という見方を支持する史料はないようであり、

Isaac らの主張は成り立ちにくい。コンマゲネ併合はそういう観点をもってしては理解しがたいのである。だが、両国の関係は、治世後半には少々変化したようである。その点について、次節で考察する。

第二節　ウェスパシアヌス帝治世後半のローマ＝パルティア関係

紀元七五年以降のローマ＝パルティア関係について文献史料はほとんど存在しない。このため、東方再編の防衛的性格を強調する先行研究の多くは、この時代のローマ＝パルティア関係は良好なものであったとみなしてきた。[16] だが、Syme, Bosworth らは、この時期に両国の関係が一気に悪化した、とする説を展開した。[17] Syme によれば、ウェスパシアヌス帝治世後期にパルティア王ウォロガエススはローマに対して戦争を企てたものの大トラヤヌス（トラヤヌス帝の父で、七三から七七年頃にシリア総督）による外交交渉によって阻止された。その根拠は次の二点である。まず、アウレリウス・ウィクトルの史書 *De Caesaribus* および作者不詳の *Epitome de Caesaribus* において、「パルティア王ウォロガエススが戦争により（*Epitome de Caesaribus* では「恐怖により」）平和へと強制された」[18] と記述されていること、次に、二世紀初頭の元老院議員小プリニウスの『パネギュリクス』において、大トラヤヌスがシリア総督の時、父のもとで見習い高級将校を務めたトラヤヌス（後の皇帝）の「パルティアに対する勝利」が、総督たる父の栄光 gloria を高めたと述べられていること、[19] である。Bosworth は、Syme のこの説を発展させた。同時期にアルメニアにおいてティリダテス王が首都アルタクサタ近郊のゴルネアエの要塞を修復している。[20] また、Bowersock が、一九三〇年代発見の碑文を再解釈し、シリア総督大トラヤヌスが何らかの「勝利」を収めたことが読み取れると主張した。[21] Bosworth はこれらを考慮に入れた上で、属州カッパドキア＝ガラティアの成立やコーカサス地方での軍事力駐屯、そしてコンマゲネ併合といった、ローマ帝国のアルメニア包囲策がウォロガエスス王に脅威を感じさせ、その結果、ウォロガエスス王はローマに対して実力行使に出たものの、大トラヤヌスによって阻止された、と理解するのである。彼らの主張はほぼ受け入れられ、ローマとパルティアの対立の証拠と考

えられるようになった。[22]

しかし、この出来事がどれほどの規模であったのかは、確証に乏しい。アウレリウス・ウィクトルの史書、及びEpitome de Caesaribusの信憑性は一般にきわめて低い。この事件について述べた一文の直後でも、属州ユダヤに関して時代錯誤的な誤謬を記している。また、先に引用した部分のテキストを「戦争によって」ではなく「彼によって」と校訂すべきという意見もある。[23] 一方、プリニウスはトラヤヌス帝の同時代人であり、作品の信憑性は高かろうが、『パネギュリクス』はトラヤヌス帝礼賛の演説であって、帝の業績をかなり美化する傾向がある。実際にトラヤヌスがどれほどの「勝利」を挙げたのか、具体的には明らかでない。しかも、プリニウスは、「パルティア」と言及するだけであって、「ウォロガエスス」とは何ら特定していない。この事件をBosworthは、七六年頃とする。しかし、最近の編年によれば、ウォロガエスス王の統治は七六／七七年頃に混乱し、七八年にはパコルス二世、ウォロガエスス二世、といった王が並び立つ混乱期になっていたらしい。[24] 従って、この時期のパルティアが、アルメニア戦争のようにローマと正面衝突したとは考えにくい上に、ウォロガエスス一世か二世なのか確かではないのである。アラニ人の脅威に対する援軍要請を拒否されたことでウォロガエススが敵意を抱き、ローマへ攻撃をかけた、とする見解もあるが、根拠のない推測である。アラニ人の脅威にさらされていたパルティアがローマを攻撃できるとは考えにくい。アルメニアでの要塞建設も、アラニ人の再襲撃に備えて行われたと考えた方が自然である。[25] ディオやスエトニウスの歴史書がパルティアとの衝突に全く言及していないのも不思議である。彼らの記述からは、ローマとパルティアの関係は、ある程度の緊張ははらんでいても、Bosworthが言うような激しい対立を読み取ることはできない。加えて、七六年頃に第一六フラウィア軍団が属州シリアからカッパドキアへ移動している。その駐屯地は属州カッパドキア北東のサタラであった。この移動は、パルティアの脅威を（それがあったとして）最も受けやすいシリアから軍団を減らすことになり、対パルティア戦略の観点からは想定しがたい措置ではないか。

確かに、Bowersockによる碑文の再解釈が正しければ、シリア総督大トラヤヌスがパルティアに対して「勝利」を収めたこと、つまり、パルティアとローマとの間に何らかの衝突があったことは否定できない。両国の関係が、治世前半ほどに良好なものではなくなったことは確かであろう。だが、その原因を、ローマの対外拡大政策に帰すことはかなり無理があるといわねばならない。ウェスパシアヌス帝期にローマ＝パルティア間の対立が始まったという認識は、トラヤヌス帝のパルティア戦争から見た結果論ではなかろうか。

ウェスパシアヌス帝期後半になると両国間の関係はある程度冷却化はしたらしいが、ローマ＝パルティア関係は、コンマゲネ併合など治世初期の政策をはさんでも悪化しなかった。コンマゲネ王国の併合を、対パルティアという視点のみから理解しようとする考えには組しがたいのである。東方辺境再編政策をパルティア、アルメニアへの軍事圧迫、もしくは両国からの防衛という視点から解釈することには大きな問題がある。それならば、辺境再編はいかなる意図の下で行われたのか。それを理解する上で鍵となるのは、属州カッパドキア＝ガラティアの成立である。この地域の軍事化が、アルメニアへの軍事圧迫の直接の証拠と考えられてきたからである。

① Josephus, Bellum Judaicum（以後 *BJ* と略す）, 7, 219-243.

② G.W. Bowersock, op.cit., p. 135 et 140; E. Dabrowa, Quelques remarqus sur le limes romain en Anatolie et en Syrie à l'époque du haut empire, *Klio*, 62, 1980, pp. 248-250.

③ Isaac., op.cit., p. 40.

④ 六六年にティリダテス王はローマに赴き、盛大な歓待を受けた。Suetonius, Nero, 13.

⑤ Suetonius, Nero, 57, 2; H. Warmington, *Suetonius Nero*, London, 1977, pp. 117-118. 攻守同盟ではなく友好条約のようなものであったろう。Cf. B. Campbell, Rome and Parthia, *War and Society in the Roman World*, ed. J. Rich & G. Shipley, 1993, London and New York, p. 233.

⑥ Suetonius, Vespasianus, 6, 4; Tacitus, *Historiae*, 4, 51.

⑦ Tacitus, *Historiae*, 4, 51.

⑧ Josephus, *BJ*, 7, 17-18.

⑨ Josephus, *BJ*, 7, 242.

⑩ Suetonius, Domitianus, 2.

⑪ F. Millar, *The Roman Near East*, Harvard, 1993, p. 83. も、第三ガ

ッリカ軍団がフラウィウス朝期から駐留していただろうが、何の具体的証拠はなさそうだ、とする。B. Isaac, op.cit., p. 39. もその点は認める。この時代の軍団駐屯地について詳細は L. Keppie, Legions in the East from Augustus to Trajan, *The Defence of the Roman and Byzantine East*, ed. P. Freeman and D. Kennedy, vol. 2, BAR, 297, 1986, pp. 420-424.

⑫ B. Isaac, op.cit., p. 38.

⑬ 属州カッパドキアにおける軍団駐留については、第二章参照。

⑭ Tacitus, Annales, 2, 58; 15, 17, etc; B. Campbell, op.cit., p. 224.

⑮ Josephus, *BJ*, 5, 460-465; Tacitus, *Historiae*, 2, 25.

⑯ ex. *The Cambridge History of Iran*, vol. 3-1, Cambridge, 1983, p. 86.

⑰ R. Syme, *Tacitus*, Oxford, 1958, p. 30f; Bosworth, op.cit., p. 77f.

⑱ Aurerius Victor, *De Caesaribus*, 9. 10; *Epitome de Caesaribus*, 9. 12.

⑲ Plinius, *Panegyricus*, 14, 1. プリニウスのこの記事は、大トラヤヌスが凱旋将軍顕彰を与えられていることと結びつけて考えられている。

⑳ SEG, 15, 836.

㉑ G.B. Bowersock, op.cit., p. 138.

㉒ もっとも、Bowersock の碑文再解釈は確定的とは考えられていない。E. Dabrowa, Les rapports entre Rome et les Parthes sous Vespasien, *Syria*, 58, 1981, pp. 203-204.

㉓ P. Dufraigne (tr.), Aurelius Victor, Livre des cesars; Paris, 1975, p. 92.

㉔ *The Cambridge History of Iran*, vol. 3-1, 1983, pp. 99 et 295. 古い編年でも、七八年にはウォロガエスとパコルス二世が並立。

㉕ T. B. Mitford, Cappadocia, p. 1193.

第二章　属州カッパドキア＝ガラティアの成立と東方辺境再編

第一節　研　究　史

属州カッパドキア＝ガラティアの設立は、ウェスパシアヌス帝期に帝国諸属州が受けた変化のうちで、最大級のものであった。属州カッパドキアと属州ガラティアが合併され、属国小アルメニアが加えられ、二個軍団が駐留し、総督には騎士身分のプロクラトルに代わってコンスル格の元老院議員が任命された。小アジア東部から中部にわたる大属州が誕生したのである。しかしながら、この大属州の成立についての史料は乏しく、その設置の詳細についても議論が多い。

この属州の成立について語る文献は、スエトニウスの『ローマ皇帝伝』のみである。それによれば、ウェスパシアヌス

帝は、「蛮族の恒常的な攻撃に対して」複数の軍団を駐留させ、コンスル格元老院議員を総督とした。[1] ローマ帝国支配下の小アジアについて論じたMagieは、これがアラニ人対策として行われたとみなす。[2] コーカサス地方北方の遊牧民であるアラニ人は、紀元七二年～七五年にかけて南下し、アルメニア、パルティアに大打撃を与えた。[3] このアラニ人こそが、スエトニウスが言うところの「蛮族」なのだとMagieは考えた。これに対してBosworthは、「蛮族」とはアラニ人を指さないと主張した。[4] 彼は、アラニ人の侵攻はカスピ海西岸と南岸を目的としたものであり、ローマにとっては対岸の火事にすぎなかった。それゆえに、これに対する備えとは言い難い。「蛮族」とは、黒海南東岸のポントゥス地方東部の原住民を指す、という。ポントゥス地方の西部は早くから属州ビテュニア＝ポントゥスの一部を形成していた一方で、東部（ポントゥス・ポレモニアクス）にはローマの属国であるポントゥス王国が存在した。この王国も六四年にはネロ帝によりローマに併合されたが、[5] 六九年にはローマの内乱に乗じて、この地でポントゥス王の解放奴隷を名乗るアニケトゥスなる人物が反乱を起こし、トラペズスを襲撃するなどした。そこで、ウェスパシアヌスは軍を派遣してこれを鎮圧した。[6] Bosworthによれば、この地が七〇年初頭には未だ不穏であったので、ウェスパシアヌス帝は小アルメニアの併合と二個軍団駐屯をもってこの地の秩序維持を図ったのであるが、帝の目的はそれだけではなかった。この時、ローマ帝国は属州カッパドキア＝ガラティアの軍事化を足がかりに、北東のコーカサス地方へも軍団を送り込んで半ば占領状態に置き、その結果、アルメニアとパルティアへの包囲網を造ることに成功したという[7]（地図参照）。つまり、ウェスパシアヌス帝は、対アルメニア、パルティアという長期的な戦略をもって、属州カッパドキア＝ガラティアの軍事化とコーカサス地方への伸長を行ったとするのである。[8] Bosworth説は大筋では多くの研究者に支持された。例えば、Isaacは、コーカサス地方への軍団駐留は否定したが、基本的にはBosworth説を認め、属州カッパドキア＝ガラティアの軍事化は、コンマゲネ併合と共に、アルメニア、パルティアへの領土拡大を念頭においたものだとした。彼は、トラヤヌス帝のパルティア戦争における前線基地が属州カッパドキア＝ガラティアのサタラ、メリテネであったことを特に指摘した。[9]

このように、近年、属州カッパドキア＝ガラティアの軍事化は、アラニ人に対する防衛ではなく、アルメニア、パルティアからの防衛、もしくはそれらへの侵略を念頭においたものだとする見解が支配的となってきた。この属州の設立は、コンマゲネ併合と並んで、ウェスパシアヌス帝の東方への軍事力展開策の中核と考えられてきたのである。しかし、前章で見たように、パルティア＝ローマ関係は治世前半には良好であった。同じ治世前半における属州カッパドキア＝ガラティア成立をアルメニア対策という側面からだけで理解することは到底できない。従って、本章では属州カッパドキア＝ガラティアの成立過程を検討し、この大属州設立の実相を明らかにする。

第二節　小アルメニア併合と属州カッパドキア＝ガラティア成立

属州カッパドキア＝ガラティアという複合属州の成立と軍事化は、ウェスパシアヌス帝期のきわめて早くに完成されたと考えられてきた[10]。というのも、七一年に属州カッパドキアの東南端、メリテネに第一二フルミナタ軍団が派遣され、七二年にはこの属州の北東辺の属国小アルメニアが併合されたので、この一連の動きと同時期に、属州カッパドキア＝ガラティアが完全に成立したと推測されたからである[11]。

だが、この属州成立に関する史料の不足もあって、具体的な状況はなかなか分からなかった。総督が、いつ騎士身分プロクラトルからコンスル格元老院議員に置き換えられたのか判然としない。史料から分かる最初のコンスル格総督Cn・ポンペイウス・コッレガの総督在職年が七六年頃で、それ以前の総督の身分がまったくわからないからである。Symeは、コンスル格総督への置換はもっと以前に行われ、おそらく最初の総督は大トラヤヌスであったろうと推測した[12]。しかし、それも根拠に乏しい。

もっとも、属州カッパドキアと属州ガラティアの合併は、ウェスパシアヌス治世初頭と思われる。騎士身分プロクラトルが軍団を指揮することはこの時代には通例ありえないことなので、属州総督に元老院議員が登用されたのは明らかに最

初の軍団が派遣された七一年だからである。この時、カッパドキアとガラティアが分離していた可能性はあるが、ガラティアは六九年までパンフュリアと合併されていた。七〇年にパンフュリアがガラティアから切り離されてリュキアと合併された時に、ガラティアもカッパドキアと合併された可能性が高く、両属州の合併は治世初期とみるのが妥当である。[13]

さて、二個目の正規軍団である第一六フラウィア軍団は、いつこの地に派遣されたのか。[14] この軍団は小アルメニアのサタラに駐屯していた。そのため、七二年の小アルメニア併合の直後というごく早い時期にサタラに第一六フラウィア軍団が派遣されて、二個軍団がこの属州に駐留、ユーフラテス川に沿ってリメスが構築された、と推測されてきた。[15] これは、属州カッパドキア＝ガラティアの設立、小アルメニア併合の目的が、国境防衛体制の確立か、もしくは、アルメニア王国併合、という軍事的目的にあった、という考えを前提にしての類推であった。

ところが、一九八三年に公にされた碑文が、新たな事実を明らかにした。[16] この碑文によれば、七五年には属州シリアに四個軍団が駐屯していたらしく、そのうちの一つが第一六フラウィア軍団だったのである。[17] とすれば、ウェスパシアヌス治世前半七五年までは属州カッパドキア＝ガラティアに一個軍団しか置かれず、治世半ば、おそらく七五年末から七六年頃にかけて新たに属州シリアから二個目の軍団が移動したということになる。[18]

この結果、属州カッパドキア＝ガラティアの成立についての従来の推測は大きな変更を余儀なくされた。二個軍団駐屯は治世初期に同時に行われたのではなく、少なくとも七五年までサタラには軍団が駐屯していなかったのである。最初の軍団駐留と二個目のそれが同じ政策的意図の下で行われた、と考える必要はなくなった。さらに注目すべきは、小アルメニアの併合が軍団駐留を伴わなかった、という点である。すなわち、この地の併合がアルメニア王国への軍事圧力もしくはそれに対する防衛を目的としたものではなかったということなのである。しかし、先行研究では、この碑文発見後もなお、軍団駐留の時期が変化したとするにとどまり、本来の意義を理解するに至っていない。

小アルメニアは、ローマ帝国外にありながらローマの宗主権を認めるという属国ではなかった。コンマゲネ王国と似た

ような境遇にあったのである。小アルメニアは、最初、おそらくティベリウス帝の時ローマに併合されて属州カッパドキアに組み込まれた[19]。その後、次のガイウス帝の時にポントゥス王ポレモの兄弟コテュスにこの地は与えられた。彼の支配はネロ帝期まで続いたらしい。ところが、ネロ帝は、五四年、アルメニア戦争の準備として、アリストブロスなる人物にこの属国を与えた[20]。

このように、この国の領土は、一旦属州カッパドキアに組込まれた領域であり、王国復活後も皇帝の一存で支配者がすげ替えられたのである。七二年の小アルメニア併合は、コンマゲネの場合と同じかそれ以上に、ウェスパシアヌス帝にとって国内問題であった[21]。実際、小アルメニア併合は貨幣史料から判明するだけである。コンマゲネ併合では軍団が派遣され、スエトニウス、ヨセフスが伝える一方、小アルメニアについての文献史料の沈黙から考えると、小アルメニア併合は軍団の派遣なくして行われた可能性もある。

では、小アルメニア併合にはいかなる意義があったのか。それは、小アルメニアのサタラの重要性につきる。ここは、アルメニアから小アジアへ至るルート上にあっただけではなく、黒海南東岸のトラペズスと小アジア内陸やシリアとを結ぶ、交通の要所であった[22]。この地をおさえることは、ローマに経済的に大きな利益をもたらしたであろう。というのも、第一に、パルティアからアルメニア経由で小アジア、シリアに至る交易がサタラを中継地としており、第二に、北インドからローマに至る交易ルートのうち、北方ルートが、バクトリア地方からアム川流域、カスピ海を経てコーカサス地方、そして黒海へ至るというものだったからである[23]。古代の著作に記されたこの北方ルートは、正確さを欠いていることからBraundなどがその存在を疑い、議論はある[24]。しかし、古代の著述家がコーカサス地方を介した交易に言及していることは動かせない。コーカサス地方自体肥沃で物資に富んだ地域であった[25]。古代人が記すのと全く同じルートではないにせよ、コーカサス地方が関与した交易の流れがあったのは確かであろう。そして、ポントゥス王国の併合によりコーカサス地方南西辺へまでローマは伸長していたのである。小アルメニア併合が通商路の掌握にあったとすれば、治世初期の軍団駐留

なき併合も十分に納得できるのである。[26]

それならば、最初の軍団駐留の意図は何処にあったのか。最初の軍団第一二フルミナタ軍団がメリテネに駐屯したことを伝えるのは、ヨセフスである。[27] この軍団は、もともと属州シリアに駐屯しており、ネロ帝期末からウェスパシアヌス帝期初頭にかけてのユダヤ戦争に加わっていた。七〇年末にエルサレムが陥落してユダヤ戦争がほぼ終結すると、ローマ側の総司令官であったウェスパシアヌス帝の長男ティトゥスは、この軍団をシリアに戻さず、メリテネへ派遣したのである。[28] ヨセフスによれば、ユダヤ戦争初期に敗北を喫したことへの懲罰的意味あいから、この軍団はメリテネへいわば左遷された。派遣の理由として軍事目的をヨセフスの記述から読み取ることはできない。

ヨセフスの言を完全に信用して良いかどうかはもちろん問題がある。しかし、一理はある。というのも、メリテネはカッパドキアに属するとはいえ南東端であり、属州シリアに近い。六九年までは平時にはシリア駐留の軍団のみが東方にいたことを考えると、第一二フルミナタ軍団のメリテネ派遣は、従来のローマの軍事政策とそれほど異なった性格を持っていたとは思えない。しかも、七〇年は、内乱終結後一年未満という治世ごく初期で、ウェスパシアヌス自身首都ローマへ帰還して間もない頃であった。また、ゲルマニアでもキウィリスの反乱が終結した直後であった。国内情勢は未だ混沌としていたといえよう。軍団派遣が、果たしてアルメニア王国の併合を念頭においた対外政策から行われたのかは疑問というほかない。さらに、ウェスパシアヌス帝が軍紀引き締めにかなり気を配っていたことをスエトニウスは伝える。[29] とすれば、メリテネ派遣も、このような軍団統轄策の一環だった可能性は高い。

もとより、パルティア、アルメニア対策という対外軍事的側面が皆無だったとはいえない。だが、先行研究が主張するような、アルメニア併合を念頭に置いて、治世初期に属州カッパドキア＝ガラティアの軍事化をすすめたという説は、二個軍団の同時派遣が否定された以上、説得力に乏しいのではないか。しかも、前述したように、ローマはこの時パルティアと良好な関係にあり、特に、第一二フルミナタ軍団をメリテネへ派遣して間もない頃に、パルティア王が友好の使節を

ゼウグマへ派遣し、ティトゥスに金の冠を送っている。[30] ローマのメリテネへの軍団派遣にパルティアが脅威を抱いていないのは明らかである。第一二フルミナタ軍団の駐屯をもって、以前の時代からとは異なるパルティア対策の始まりと主張するには無理がある。

それよりも重要と思われるのは、この時期に属州カッパドキアとガラティアの合併が行われたことである。黒海南東岸にあったポントゥス王国が六四年にネロ帝により併合された時、この王国が組み込まれたのは属州ガラティアへであった。[31] 六九年のアニケトゥスの反乱のような、ローマの支配に対する抵抗姿勢が、七〇年になって変化したとは考えにくい。カッパドキアとガラティアの合併はこの問題の解決に役立ったと思われる。なぜならば、一人の総督が両方を統轄したことから、メリテネの第一二フルミナタ軍団を、ガラティアの治安維持に容易に振り向けられるようになったからである。[32] メリテネから黒海南東岸まで隔たりはある。だが、アニケトゥスの反乱は一応終結し、緊急に対応する必要はなかったわけであり、メリテネへの駐屯は、従来の国境政策を大幅に変更することなく黒海南東岸の秩序維持を図るには十分だった。[33] 最初の軍団派遣にはこのような背景があったのである。

七五年までの属州カッパドキア＝ガラティアの成立をめぐる状況は、対外関係よりも、むしろ、この大属州内の北東情勢に対応したものであった、といえる。アルメニア対策としての属州カッパドキア＝ガラティアの「軍事化」という、先行研究がこぞって主張したような状況は、少なくとも治世前半にはありえなかったのである。ならば、七六年頃の二番目の軍団派遣についてはどうか。節を改めて検討する。

第三節　第一六フラウィア軍団派遣の意義——七六年以降の属州カッパドキア＝ガラティア

第一六フラウィア軍団のサタラ駐屯は、七六年頃という時期を考慮すると、Magieがいうように、アラニ人の脅威に対する反応という側面を無視することはできない。アラニ人のアルメニア、パルティア北西部のメディアへの侵攻は七二年

頃に始まり、七五年頃まで続いたらしい。七五年にパルティア王ウォロガエススはローマに援軍と帝の息子二人のうち一人を将軍として派遣することを要請した。ウェスパシアヌス帝はその要請を拒否したのであるが、この時、帝の息子ドミティアヌスは己が派遣されることを望んで尽力したものの失敗した、とスエトニウスは伝える。[34] これは、ローマの政治中枢において、アラニ人の脅威を認める人々もおり、援軍要請の是非をめぐる議論があったことを示すのではなかろうか。援軍は拒否したが、結局ローマ側がアラニ人の危険性を認めてサタラに軍団を派遣したとしてもさほど不思議ではないのである。

確かに、Boswortｈが考えたように、アラニ人の侵攻はアルメニアやメディアを指向したもので、ローマに対する直接の脅威とはならなかったであろう。[35] だからといって、アラニ人がアルメニア侵略後、カッパドキア方面へ進出する可能性も少ない、とは言えない。実際、紀元一三五年に、アラニ人はメディア、アルメニアを襲った後、カッパドキア方面へ侵略し、ローマに撃退された。[36] Boswortｈは、この時のアラニ人はローマにとって大きな脅威でなかったとするが、ローマがアラニ人の侵攻を受けた事実は否定できない。

ローマは七五年にはコーカサス地方との関わりを強めていた。このことは実は上の状況と関連がある。一枚の碑文から、この年にローマがコーカサス地方のイベリア王国において、王国の城壁建設を援助したことが知られるが、[37] これは、この地方におけるローマの存在を示す最初の碑文である。[38] Boswortｈは、これをもってローマがコーカサス地方を支配下に置き、アルメニアを狙っていた証拠とした。だが、この碑文一枚からそこまで連想するのはきわめて問題である。[39] 七五年という時期を考えると、この時にローマがコーカサス地方へ関心を強めたことは、アラニ人の動きと何らかの関係があったのであろう。というのも、アラニ人はコーカサス山脈の北方に住んでいたため、南下には主要な峠をおさえるイベリア、もしくはその東方のアルバニアの承認が必要だったからである。[40] この時代のアラニ人の南下は全てどちらかの王国との連携行動だったらしい。これらの王国はパルティアと対立・和解を繰り返しており、アラニ人の目標も主にアルメニアから

パルティアにかけてであった。七〇年代のアラニ人がイベリア、アルバニアどちらと手を組んだかは特定しがたいが、アルメニアだけでなくカスピ海南西のメディアへも侵入したことを考慮すると、後者であろう。[11] アルバニアは、イベリアともしばしば対立していた。アラニ人の攻撃は、アルメニアだけでなく、イベリア王国にも及んだ可能性がある。Braundは、西イベリア地方において七〇年代に何らかの騒動が起こったことを伝える。[12] とすれば、イベリア王国の城壁建設は、アラニ人に対抗する意図が大きかったと思われる。イベリア王国が安定し、ローマと友好関係にある限り、ローマは直接アラニ人の脅威を受けることはほとんどなかったであろうからである。しかも、黒海南東岸からコーカサス地方にかけては、前節で見たように、ローマにとって経済的に大きな意味を持っていた。この地方の安定は、交易に直接関わる大問題であった。サタラの併合が交易ルートとの関連の上にあったのならば、七六年頃における第一六フラウィア軍団の駐留も、コーカサス情勢を睨んだ政策であった可能性は高い。さらに、先述したように小アルメニア、ポントゥス王国旧領は、治安が安定していたとは言い難かった。コーカサス地方までも含む広域的状況に対応するにはメリテネの一個軍団だけでは不十分だったのかもしれない。スエトニウスは「蛮族の恒常的な攻撃」をカッパドキアへの軍団創設の意図、と記した。[13] 「恒常的な攻撃」というのは割引いて考える必要があるかもしれないが、このような「蛮族」にもっとも適合するのは、黒海南東岸の原住民なのである。この点についてはBosworthを支持できよう。[14] 実際、治安維持のための軍団駐屯は前例がある。ヒスパニアには外敵は存在しないにも関わらず、反抗的な山岳民族に備えて軍団が駐屯し、ユダヤでもユダヤ人の再反乱を防ぐために一個軍団が置かれた。特にユダヤへのそれは同じウェスパシアヌス帝期に行われたのであった。すなわち、七五、六年頃、ローマは黒海南東岸からコーカサス地方にかけてに大きな関心を示していたのであり、それがコーカサス地方での活動、サタラへの第一六フラウィア軍団駐屯となって現れたといえる。シリアからメリテネを経由してサタラ、トラペズスへ伸びる道路の存在を明らかにしたMitfordは、これを防衛ライン（リメス）と考えたのであるが、[15] しかし、一個軍団をパルティアの直接的脅威を受けうるシリアから小アジア北東部へ動かしたことは不思議であり、防御

的移動とは到底言えない。むしろ、黒海南東岸の重要性が増加した、と解釈すべきであろう。二個目の軍団派遣は、小アジア北東部とコーカサス地方へのローマの支配伸長の証拠なのである。

第四節　東方辺境再編の意図——帝国財政の再建

属州カッパドキア＝ガラティアは以上のような過程で形成されていった。先行研究が主張したような軍事的意図は、治世半ばまで見られなかった。そして、治世後半の軍団駐屯は、アルメニア、パルティアを指向したというよりも、コーカサス地方との関係緊密化と小アジア北東部における支配安定の視点から理解されるべきものであった。すなわち、属州カッパドキア＝ガラティアの設立は、従来考えられていたようにアルメニア、パルティアへの拡大を狙う、もしくはそれらに対する防衛ラインの構築という統一的な政策意図の下で行われた、とはいえない。それは二段階に分けて整理することができよう。[16]

第一段階は七五年までである。一個軍団の駐留、小アルメニア併合、属州カッパドキアと属州ガラティアの合併が行われ、おそらく総督には元老院議員身分の者が派遣された。この結果、小アジア中・東部が一人の総督の指揮下に入り、また、黒海南東岸からコーカサス地方西南にかけての地域の治安維持が行われ、初めて小アジア中・東部へローマの統治が十分に及ぶようになったのである。

第二段階は、七六年以後であり、サタラへの第一六フラウィア軍団の駐屯をもって始まる。これは、従来、アルメニアとの対抗関係から重視されてきたのである。だが、サタラは、アルメニアへの重要な戦略的位置を占めると共に、黒海南東岸、及びコーカサス地方とローマとの関係においても重要な位置を占めていた。第一六フラウィア軍団の駐留は、対アルメニア政策というよりも対コーカサス政策、小アジア北東部に対する治世初期からの影響力行使の延長線上で捉えられるのである。[17]これは、アラニ人の南下などで不安定なコーカサス情勢に対応し、交易路の安定を図るためであった。

こうして、属州カッパドキア＝ガラティアの「軍事化」が完成したのは治世後半であった。そして、その時は既にこの属州の基本的な形は形成されていたのである。それでは、なぜ治世初期に東方辺境はこのような改編を受けたのか。この点で興味深いのは、この属州カッパドキア＝ガラティア再編及びコンマゲネ併合とほぼ同時期に、東方辺境だけでなく、帝国東部全体が大きな変化を受けたことである。

ウェスパシアヌス帝治世初期おそらく七〇年頃に、小アジア南部の属州リュキアが何らかの特権を奪われて属州パンフュリアと合併され、属州リュキア＝パンフュリアとなった。また、キリキア西部はコンマゲネ王国の飛び地を含んだのであるが、コンマゲネの併合と共にローマに併合され、キリキア東部と合併されて属州キリキアがつくられた。この結果、小アジアからはすべての属国が消滅し、ビテュニア＝ポントゥス、リュキア＝パンフュリア、カッパドキア＝ガラティア、キリキア、アシアの五つの属州のみから構成されることとなった。つまり、七〇―七二年にかけてに急速に自治州、属国が属州へ組織替えされ、小アジアが完全に属州化されたのである。[48]

さらに、小アジア以外でも、自治を認められていたアカイアは属州にされ、ビザンティウム、ロドス島、サモス島は自治を取り上げられた。属州シリアでは、コンマゲネ王国の併合に加えて、属国エメサも消滅した可能性がある。[49] 帝国東部で存在していた属国で明らかなものはユダヤのみとなった。[50] すなわち、ウェスパシアヌス治世初期には、帝国東部全体が、属州システムへ組み込まれ、それまでとは全く異なる風景を呈することとなったのである。

その背景は、治世初期の財政危機である。ウェスパシアヌス帝が勝利した当初、帝国はネロ帝末期の混乱とその後の内乱のために疲弊し、財政は逼迫していた。このためにウェスパシアヌスにとっては、帝権を確固たるものとすることに加え、財政再建も緊急の課題であった。帝はこの問題を深刻に受け止め、事態の打開を図った。[51] 例えば、アシア金庫、アレクサンドリア金庫、ユダヤ金庫の新設である。[52] これら新設の徴税機構は、史料からは上記三種が認められるにすぎず、実際はもっと多くが存在した可能性は否定できないが、これらが、全て帝国東部を対象として設置された事実こそ、きわめ

て重要といわねばならない。[53] ウェスパシアヌス帝はローマ帝国東部を中心として財政再建を図ったのである。

財政再建には、帝国東部を速やかに属州化することが重要であった。ウェスパシアヌス即位当時は、帝国東部には自治州や属国が散在して属州間の交通の便も悪く、また、ローマが支配していたとはいえ、帝国東部の、特に辺境では、隅々まで十分な統治を行き渡らせることはできていなかった。効率よく税を徴収し、帝国再建を行うには、まず東部のこの状態を解決せねばならなかったのである。辺境再編も、この政策の一環であったと考えられよう。先行研究では、アカイアの属州化、リュキアとパンフュリアの合併など非辺境の再編については財政再建の意図は認められてきたが、辺境に関しては軍事的意図のみがクローズアップされてきた。[54] だが、これらが同じ治世初期に行われた以上、辺境と非辺境を分割して考えるのは不自然である。また、Rémyらは小アジア非辺境部の再編さえもユーフラテス西岸への補給を速やかにする目的であったことを強調するが、本稿で論じたようにパルティアとの関係が悪くなく緊急に対応する状況でないことを考慮すると、彼らの主張は当を得ていない。[55]

特に属州カッパドキア＝ガラティア成立の第一段階は、辺境再編が東部全体の再編の一環を成したことを証明している。この複合属州の成立により、小アジア中部から東部が一人の総督の支配下に入ることとなった。属州カッパドキアは、ティベリウス帝期の一七年に属国カッパドキアが併合されて成立したという、比較的遅い時期の属州である。さらに、この地域にはポントゥス王国及び、併合後の小アルメニアという旧属国が含まれ、ローマ中央の統治が十分に行き渡っていたとはまさに言い難いところであった。[56] ここに元老院議員身分の総督を送り込み、統一的に統轄させたことは、明らかにこの未発展の地域の取り込みを促したであろう。少くとも治世後半には活発な道路建設が進んでいたことが明らかになってきている。[57] これを軍事目的とみる大半の先行研究については否定しがたい面もあるにはあるが、[58] 小アジア中部から東部の広大な地域の交通網整備が小アジア諸属州間のコミュニケーションを改善し、中央からの統治がより効率的に及ぶようになった面をより重視する必要を筆者は感じる。実際、非辺境である属州ビテュニア＝ポントゥスでもウェスパシアヌス帝

期後半に道路建設が盛んに行われた。[59] この属州は黒海南西岸にあり、黒海南東とのコミュニケーションの改善に役立ったことは明らかである。しかも、ウェスパシアヌス帝期末には、属州総督の下に新たに司法担当副官職 legatus iuridicus が設置された。これは、この属州の行政的要求がいかに大きかったかを示していよう。属州カッパドキア＝ガラティア成立は、辺境整備の典型例なのである。[60]

同様な道路整備は属州シリアでも行われた。シリア東部のパルミラからユーフラテス川西岸のスラに至る道路が七五年に建設されたことが里程標によって判明している。[61] これを Isaac などは、ユーフラテス西岸へ迅速に兵士を送り込むためとみるが、[62] 道路建設といえば必ず軍事目的というのは短絡にすぎる。Sidebotham の研究は、このような道路建設が、パルミラ、シリア内部のデカポリス地方の発展を促した点を指摘した。[63] 一方、シリアでの道路建設は東方だけを指向していたのではない。同じウェスパシアヌス帝期にシリア南部からユダヤにかけて建設された道路はデカポリス地方から地中海沿岸へ至るものであった。[64] これが純粋に軍事的意義から建設されたとは言いがたい。

コンマゲネ併合や属州カッパドキア＝ガラティア成立について辺境防衛、もしくは、領土拡大の視点からしか理解してこなかった先行研究には大きな問題があるのである。特に、コンマゲネ、小アルメニアの併合は、経済的に大きな利益をローマにもたらしたといえる。小アルメニアが交易路に位置していたことは述べたが、コンマゲネ王国の経済的重要性は、それ以上であった。この王国は、東西貿易の中継地に位置し、タキトゥスが語るところでは、属国の中で最も富裕な国であった。[65]

以上の考察をまとめると、次のようになろう。東方辺境再編は、同時期の帝国東部再編の一部として行われたのであり、経済的な側面が非常に大きかった。ただ、それが辺境において行われたことから、対外的、軍事的側面が強調されすぎてきたのであった。

帝国東部においてとりわけ積極的に再編が行われた要因の一つとしては、東部が六九年内乱の被害を全く受けなかった

ことがあげられる。内乱時の他の三皇帝はいずれも西方属州かイタリアで立ち、戦場は西方に限定されていた。一方、ウェスパシアヌス帝は東部全体の一致した支持を基にウィテッリウス帝に対して反乱を起こしたのであった。[66] 中でも、帝国東部のアシア、シリア、エジプトは最富裕属州に数えられる地域で、ウェスパシアヌス帝の勢力基盤の中核であった。遠征軍をイタリアへ送り出した後も、帝はアレクサンドリアにとどまり、ローマに移動したのは七〇年半ばになってからであって、帝国東部に固い支配を確立することに最も注意を払っていた。[67] また、彼自身ネロ帝期末からユダヤ戦争の総司令官としてユダヤに赴いており、帝国東部に対する知識は豊富であった。

六九年内乱のこのような状況が、ウェスパシアヌス治世のごく初期から帝国東部に対して抜本的な行政改革が行われた背景にあった、といえよう。そして、それが端的に表れたのが東方辺境だったのである。小アジア西部は裕福な土地で帝国財政を潤していた一方、小アジア東部には属国があり、属州についても騎士身分が統治する、発展が遅れた状態であって、ローマの支配が行き渡ってはいない辺境であった。だが、東方辺境再編の結果、この地が、ネロ帝期のアルメニアへの単なる前線基地から、帝国東部の一部として十分な統治の及ぶ地域へと発展する契機ができたのである。コーカサスへのローマの影響力拡大もその流れの中にあった。

加えて、第一六フラウィア軍団の移動は、シリアからカッパドキア＝ガラティアへ、ウェスパシアヌス帝の政策の重心が移動したことを示すのかもしれない。本章で論じたように、小アジア北東部への関心はウェスパシアヌス帝期を通じて大きく、七五年以降さらに増大していった。この更なる増大と軍団の移動、道路網などの属州整備の進展については、パルティアの国内情勢との関連も推測できるのである。前述したように、七二年から七五年までパルティアはアラニ人の侵略に対処せねばならず、七六／七七年以後は内紛に陥ったらしい。この内紛が、パルティアからパルミラ等を経由してシリアへ入ってくる交易路の状態を悪化させたことは十分にありえる。もしそうであれば、パルティアを迂回することが可能なコーカサス地方の重要性は、ローマにとってますます大きくなってきていたといえよう。[68]

このように、東方辺境再編は、単なる地方レヴェルの辺境政策ではなく、帝国財政の再建という、全帝国レヴェルでの目的の下に推進されたのである。帝国東部再編をウェスパシアヌス帝がきわめて重視したことは、その総督人事にも現れている。最終章では、ウェスパシアヌス帝の人材登用という側面から、帝国東部再編政策の意義を検討する。

① Suetonius, Vespasianus, 8, 4.

② D. Magie, op.cit., p. 574f. R.K. Sherk, Roman Galatia, *ANRW*, II, 7-2, 1980, p. 997; T.B. Mitford, Cappadocia, p. 1192f. も同様の立場をとる。

③ Josephus, *BJ*, 7, 244-251; Suetonius, Domitianus, 2, 2.

④ A.B. Bosworth, op.cit., 63-78.

⑤ Suetonius, Nero, 18.

⑥ Tacitus, *Historiae*, 3, 47-48.

⑦ コーカサス地方への対処であったことは、D. Magie, op.cit., p. 575 なども短く指摘。

⑧ A.B. Bosworth, op.cit., p. 76.

⑨ B. Isaac, op.cit., p. 42. C. R. Whittaker, *Frontiers of the Roman Empire*, 1994, Baltimore and London, p. 56. も同様にこれら駐屯地が侵略を目的としていたことを第一に考える。

⑩ T. B. Mitford, Cappadocia, 1980, p. 1180f.

⑪ 第一二フルミナタ軍団は七〇年にメリテネへ派遣されたが、実際の到着は七一年の可能性もある。ex. T.B. Mitford, Further Inscriptions from the Cappadocian Limes, *ZPE*, p. 174.

⑫ R. Syme, op.cit., p. 31.

⑬ リュキア＝パンフュリアの合併については、S. Mitchell, Anatolia, vol. II, Oxford, 1993, pp. 154-156; B. Rémy, *L'Evolution administrative de L'Anatolie aux trois premiers siècles de notre ère*, Lyon, 1986, p. 63.

⑭ ウェスパシアヌス帝期の派遣を否定する説もある（F. Cumont, Le gouvernement de Cappadoce sous les Flaviens, *Academie royale de Belgique, Bulletin de la classe des lettres*, 1905, 210f.）。だが、複数軍団が駐屯したというスエトニウスの言及と真っ向からぶつかるのでそうがに受け入れがたい。

⑮ T.B. Mitford, Some Inscriptions from the Cappadocian Limes, *JRS*, 64, 1974, p. 166; R.K. Sherk, op. cit., p. 997.

⑯ D. Van Berchem, Une inscription flavienne du Musee d'Antioche, *Museum Helveticum*, 40, 1983, pp. 185-196; *AE*, 1983, no. 927.

⑰ 第一六フラウィア軍団のシリアにおける創設については、Dio Cassius, 55, 3. cf. E. Dabrowa, Sur la création de la légion XVI Flavia, *Latomus*, 41, 1982, pp. 614-19.

⑱ コッレガがコンスル格の総督で、二個軍団を指揮したと考えるのが妥当だからである。

⑲ A.H.M. Jones, *The Cities of the Eastern Roman Provinces*, Oxford, 1971, pp. 169-170 et 427; T.B. Mitford, Cappadocia, p. 1173f.

⑳ Tacitus, *Annales*, 13, 7.

㉑ 併合は七一年の可能性もある。B. Rémy , op.cit., P. 53.

㉒ サタラの経済的・戦略的重要性については、T.B. Mitford, Some

Inscriptions from the Cappadocian Limes, *JRS*, 64, 1974, p. 165f.

㉓ Plinius, *NH*, 6, 19, 52; Strabon, 11, 7, 3.

㉔ D. Braund, *Georgian Antiquity*, Oxford, 1994, p. 41; N.H.H. Sitwell, *The World the Romans knew*, London, 1984, p. 189f. など。一方、存在を認めるものには J. Thorley, The Development of Trade between the Roman Empire and the East under Augustus, *Greece & Rome*, 16, 1969, p. 215; R. G. Suny, *The Making of the Georgian Nation*, California, 1988, p. 17. など。

㉕ コーカサス地方中央のイベリア王国の繁栄は、ストラボンが伝える。Strabon, 11, 2.

㉖ 同様に、ウェスパシアヌス帝のこの地方への商業的関心を指摘するものに、J. Thorley, op.cit., p. 215. 一方、B. Rémy, op.cit., 1986, p. 57. は、商業的関心を認めるが低く評価。

㉗ Josephus, *BJ*, 7, 17-18.

㉘ メリテネ到着は七一年と考えられる。ex. B. Remy, op.cit., p. 51.

㉙ Suetonius, Vespasianus, 8, 2-3.

㉚ Josephus, *BJ*, 7, 105-106.

㉛ R.K. Sherk, op.cit. p. 961f; S. Mitchell, op.cit., p. 153.

㉜ ヨセフス『ユダヤ戦記』中でアグリッパ二世は、黒海南東岸からコーカサス地方にかけての諸民族がローマの支配に服したことを語っている。これは、ネロ帝期に時代設定された演説であるが、内容はウェスパシアヌス帝期の情勢を反映したものだと考えられている。Josephus, *BJ*, 2, 366-367.

㉝ Bosworth も黒海南東岸の原住民への対応を考えているが、彼は、サタラへの軍団駐屯がそれにあたるとし、メリテネへのそれはパルティア対策と見なす。また、アルメニアへの軍事的圧力を強調しており、筆者の見解とは異なる。Sherk も同様に原住民への対応を指摘するが、属州カッパドキア＝ガラティア軍事化による国境防衛の側面を重視。また、カッパドキアとガラティアの合併の理由を説明しない。R.K. Sherk, op.cit., p. 995.

㉞ Sutonius, Domitianus, 2; Dio Cassius, 66, 15, 3.

㉟ A.B. Bosworth, Arrian and the Arani, *HSCP*, 81, 1977, p. 223. は、この時アラニ人がカスピ海東岸を南下してメディアに至り、そこから西部へ移動してアルメニアへ攻撃をかけ、コーカサス地方を抜けて戻っていったと推定したが、あまりにも突飛で受け入れがたい。

㊱ Dio Cassius, 69, 15.

㊲ ILS 8795 = IGRR III, 133 = M. McCrum and A.G. Woodhead, *Select Documents of the Principates of the Flavian Emperors*, Cambridge, 1966, no. 237.

㊳ ネロ帝期における同様の援助を D. Braund, op.cit., p. 229. は推測するが、仮定である。

㊴ 別の碑文（*AE*, 1951, no. 263.）からドミティアヌス帝期にカスピ海西南岸でローマの百人隊長が何らかの活動を行っていたことが知られる。これら二碑文から、フラウィウス朝期にローカサス地方全体がローマの支配下に入っていた、とする。Bosworth 説への反論については、D. Braund, op.cit., p. 229; B. Isaac, op.cit., p. 45.

㊵ ダリエル峠とデルベンド峠が主要な二つの峠であったが、前者はイベリアが、後者はアルバニアがおさえていた。なお、Josephus, *BJ*, 7, 245. はアラニ人がヒュルカニア人と結んだと伝えるが、これはアルバニア人かイベリア人の間違いの可能性が高い。

㊶ 七〇年代初頭にパルティアとの関係が悪化したイベリアがアラニ人と手を結んだと T.B. Mitford, Cappadocia, p. 1193. は考えるが、D.

Braund, op.cit., p. 226f. は、アルバニアがアラニ人と連携してイベリア人、アルメニア人と敵対したと考える。

㊷ D. Braund, op.cit., p. 227.

㊸ Suetonius, Vespasianus, 8, 4.

㊹ R. K. Sherk, op.cit., p. 995 も同様の指摘をするが、黒海原住民よりもアラニ人対策を重視する。彼は、ローマがイベリア、アルバニア双方と友好関係にあった、とする。

㊺ T. B. Mitford, Some Inscriptions from the Cappadocian Limes, *JRS*, 64, 1974, p. 160f.

㊻ B. Isaac, op.cit., p. 36; F. Millar, op.cit., p. 89. も二段階であったことを示唆するが、それ以上には考察していない。B. Rémy, op.cit., pp. 51-61. は、属州カッパドキア＝ガラティア成立を最も詳細に論じており、コーカサス地方に関してはかなり筆者と類似した見解だが、軍事に比重を置き、また従来の対パルティア観を踏襲する点で、本稿とは異なる。

㊼ ウェスパシアヌスの属州カッパドキア＝ガラティア政策が、アルメニア併合を指向していたことへの疑問は、M-L. Chaumont, L'Arménie entre Rome et l'Iran, *ANRW*, II, 9-1, 1976, p.126.

㊽ Suetonius, Vespasianus, 8, 4 によれば、ネロ帝（もしくはガルバ帝）期に自治州だったリュキアは、ウェスパシアヌス帝によって自治を奪われて属州に組織替えされた。しかし、近年の碑文研究により、リュキアはネロ帝期に自治州だったのではなく、何らかの特権を賦与された属州だったが、ウェスパシアヌス帝によってその特権を剝奪されたとする見解が有力となった。S. Mitchell, op.cit., p. 154; B. Rémy, op.cit., p. 46 et 63.

㊾ 属国エメサの消滅は、明確な時期は不明。七二年のコンマゲネ併合時には確実に存在したが、ウェスパシアヌス治世末期にはもはや王国ではなかった可能性がある。ex. R.D., Sullivan, The Dynasty of Emesa, *ANRW*, II, 8, 1977, 218-219; F. Millar, op.cit., p. 84.

㊿ この王国は、フラウィウス家と特に深いつながりにあった。

(51) Suetonius, Vespasianus, 16; Dio Cassius, 66, 8, 2-6

(52) L. Homo, *Vespasien, l'empereur du bon sens*, Paris, 1949, p. 307; D. Magie, op.cit., p. 568; M.P. Charlesworth, The Flavian Dynasty, *CAH*, 11, p. 15.

(53) ユダヤ金庫は、ユダヤ人の反乱に対する懲罰的意味合いもあったろうが、反乱側でないユダヤ人にも適用されたことを考えると、単なる罰則以上の意味を持ったと思われる。

(54) M.P. Charlesworth, op.cit., pp. 13-19; H.G. Pflaum, *Les procurateurs équestres sous le Haut-Empire romain*, Paris, 1950, 45-46.

(55) B. Rémy, op.cit., p. 50.

(56) Arrianus, *Periplus*, 11, 1-3. Cf. A.B. Bosworth, Vespasian's Reorganization of the North-East Frontier, *Antichton*, 10, 1976, p. 70f.

(57) D. H. French, The Roman Road-system of Asia Minor, *ANRW*, II, 7-2, pp. 707-711 et 715-717.

(58) 道路建設の活発化に言及する先行研究のほとんどすべては、これを、ユーフラテス川まで容易に軍団を移動させるための軍事的措置と考えた。一方で、道路建設を小アジア内陸の交通円滑化のためと考えるものには、B. Campbell, op.cit., p. 234.

(59) D. H. French, Milestones of Pontus, Galatia, Phrygia and Lycia, *ZPE*, 43, 1981, p. 149f.

(60) もちろん、それが、後のトラヤヌス帝のパルティア戦争の基礎となった側面は否めないが、あくまでも、辺境整備の副次的効果であった。

⑥1 *AE*, 1933, no. 205.
⑥2 B. Isaac, op.cit., pp. 33-35; T.B. Mitford, Cappadocia, pp. 1183-1185; B. Rémy, op.cit., p. 61.
⑥3 S.E. Sidebotham, *Roman Policy in the Erythra Thalassa*, Leiden, 1986, p. 75.
⑥4 S. E. Sidebotham, op.cit., p. 74.
⑥5 Tacitus, *Historiae*, 2, 81, 1; Josephus, BJ, 5, 461.
⑥6 Tacitus, *Historiae*, 2, 81.
⑥7 Suetonius, Vespasianus, 7; Tacitus, *Historiae*, 2, 82; Dio Cassius, 65, 9, 2.
⑥8 M. P. Charlesworth, *Trade Routes and Commerce of the Roman Empire*, 2nd ed., Chicago, 1926, p. 105f. も同様の指摘をする。

第三章　東部属州上層家系の勃興と属州総督

第一節　帝国東部属州総督

六九年内乱において、ウェスパシアヌス帝の勢力基盤が帝国東部にあったことは既に述べた。この時、彼を支持する中核となったのは、その指揮下でユダヤ戦争に従事していた正規軍団の軍団長たちと、属州シリア駐屯の軍団長たちであった。勝利に直接貢献したのはドナウ地方の軍団であったが、反乱当初からウェスパシアヌスを支持したのは、彼ら帝国東部の軍団長たちであった。① そして、ウェスパシアヌス帝が統治を開始した後、彼らが専ら用いられたのは帝国東部属州であり、しかも、属州再編に深く関わっていたのである。

属州カッパドキア＝ガラティアに二個目の軍団が派遣された七六年頃のカッパドキア＝ガラティア総督はCn・ポンペイウス・コッレガであり、彼に続いて総督となったのは、M・ヒッリウス・フロント・ネラティウス・パンサ（在職 七八―八〇年）、A・カエセンニウス・ガッルス（八一―八三年）であった。彼らは皆、六九年内乱ではシリア駐留の軍団長たちであった。この属州が治世後半にきわめて重要性に富むと認識されていたのは明らかである。また、パンサは合併された属州リュキア＝パンフュリアの最初の総督でもあった。

属州シリアにも主に帝の親族やフラウィウス派元老院議員が派遣された。コンマゲネ併合を指揮したのは、親族のL・カエセンニウス・パエトゥスであった。彼はその後すぐに死亡したらしく、マリウス・ケルススがおそらく代理で一年間総督として赴任した後、前述の大トラヤヌスが派遣された。彼は七三年から七七年の間属州シリアを統治し、七八年にはアシア総督となった。キリキアの最初の総督にはアスプレナス・カエシウス・カッシアヌスが任命された。彼の総督以前の経歴は不明であるが、六九年内乱時のガラティア＝パンフュリア総督L・ノニウス・カルプルニウス・アスプレナスの親族であったらしい。[3] 彼は、旧パトリキであったにも関わらず、ウェスパシアヌス帝期に属州統治に登用された希有な人物であり、帝の信頼がきわめて厚かったことがわかる。[4]

また、再編された属州ではないが、属州ユダヤ総督にも腹心が任じられた。この属州には親族、新パトリキに加えて、アドレクティ、つまり、昇格 adlectio によって新たに元老院議員となった人々も送り込まれた。昇格とは、騎士身分として経歴を歩んできた者を元老院議員身分へ編入する措置で、この手段でウェスパシアヌス帝は六九年と七三、四年に多くの騎士身分を元老院議員に上げた。彼らは、ウェスパシアヌス政権、さらには後のフラウィウス朝をも支えた重要な基盤であった。ユダヤ戦争終結後の最初の総督は、親族で、六九年にはユダヤでウェスパシアヌス配下の軍団長を勤めたウェットゥレヌス・ケリアリスが任命された（七〇―七一年）。ついでルキリウス・バッススが任命された（七一―七二年）。彼はアドレクティで、六九年にはイタリアにおいてラヴェンナ、ミセヌムの両艦隊がウェスパシアヌスに寝返るよう説得するなど、重要な役割を演じた。そのため、内乱後元老院議員身分に昇格させられたらしい。が、バッススはすぐに死亡し、新パトリキであるフラウィウス・シルウァが総督となった（七三―七七年）。彼の後任はアントニウス・サトゥルニヌスで（七八―八〇年）、やはりアドレクティであった。[6]

以上見てきたように、再編された属州には、ウェスパシアヌス帝の「腹心」と表現してもおかしくない人物ばかりが最初の総督として赴任したのである。[7] 特に、属州カッパドキア＝ガラティアなどでは、一貫して、腹心中の腹心が登用され

ていった。

一方、大トラヤヌスの後、七八年頃にシリア総督に登用されたL・ケイオニウス・コンモドゥスは、新パトリキではあったが、以前の経歴がほとんど知られず、大トラヤヌスと比べれば未経験の、おそらくは若年の人物であったと思われる。属州シリアにこのような人物が派遣されたのは、本稿の考察が正鵠を射ていれば、不思議ではない。前章で見たように、七六年頃に属州カッパドキア＝ガラティアへ第一六フラウィア軍団が移動し、また、パルティアは政情不安定であり、シリア総督にそれほどの行政手腕は必要とされなくなったのである。しかも、この時期のカッパドキア＝ガラティア総督は、属州リュキア＝パンフュリアの再編に携わったらしいネラティウス・パンサであった。属州カッパドキア＝ガラティアがこの時期にはシリアと同じほど重要性を増していた根拠となろう。

以上のように、内乱以来の「腹心」たちを送り込んで重点的に行われた帝国東部再編政策は、帝国財政再建だけでなく、帝国東部の将来にも大きな影響を与えた。それまでばらばらであった小アジア、属州シリアは、計六つの属州に整頓され、「東方属州」としてのまとまりをはじめて与えられた。さらに、東部属州上層家系の中央政界への進出をも引き起こしたのである。

第二節　東部属州上層家系の台頭

第一に、帝国東部再編により属州化が推進された結果、東部属州行政の円滑な運営のためには現地について知識のある人材が必要となり、それ以前よりずっと多くの東部属州出身者の協力が必要になった。特に、このような行政業務に重用されたのは、アドレクティであった。ウェスパシアヌス帝のアドレクティのうち、東部出身が確実な者は、C・アンティウス・アウルス・ユリウス・クアドゥラトゥス、Ti・ユリウス・ケルスス・ポレマエアヌス、C・カリスタニウス・フロントの三人であり、数は少ない。だが、彼らは、先述の司法担当副官職を初めとして、多くの総督副官職やプラエトル格

総督職を歴任した。また、アドレクティではなく、最初から元老院議員として経歴を始めた東部出身者の登用も知られている。とりわけ、司法担当副官にはドミティアヌス帝期初頭まで東部出身者ばかりが登用され、しかも、彼らは前述のアドレクティ二人と新パトリキであった[8]。

こうした東部属州人の登用は、ネロ帝期までにはほとんどみられないことであった。大体、東部出身元老院議員はネロ帝期まで非常に少数だったのである[9]。ウェスパシアヌス帝期に登用され始めた彼らは、その後もティトゥス帝、ドミティアヌス帝によっても用いられ、ドミティアヌス帝期後半には、最高公職のコンスルにまで到達した[10]。ウェスパシアヌス帝の東部再編で用いられたことが、彼ら東部初のコンスル群を生んだといえよう。もっとも、帝国東部再編に用いられたことから、彼らが優遇されたとまでは言えない。だが、彼らの属州統治への登用は、彼らが中央政界で上昇する上で、もう一つ重要な意味を持った。彼らは、帝国東部に属州総督として派遣されていたウェスパシアヌス帝の「腹心」たちの指揮下に、しばしば副官として入ることがあったのである。これは、彼らと「腹心」たちとのパトロネジを生んだと思われる。「腹心」たちは、ウェスパシアヌス治世後半にローマ中央政界において旧来の有力元老院議員たちに代わって一大勢力を形成し始めていた[11]。そのような勢力と結びつくことは、元老院内で弱小な彼ら東部出身元老院議員たちにとってきわめて有利な結果をもたらしたと思われる。そのパトロネジが最も顕著に働いた例が、クアドゥラトゥス家の例である。先述のアドレクティの一人、アンティウス・クアドゥラトゥスは、ウェスパシアヌス帝治世の後半にアシア総督副官を二年間務めたのであるが、そのうちの一年は、大トラヤヌスが総督であった。これは、クアドゥラトゥスのその後に大きな影響を与えた。大トラヤヌスの息子トラヤヌスがのちに帝位についた時、このクアドゥラトゥスはシリア総督職につき、その後、二度目の正規コンスル職まで与えられた。しかも、彼の一族であるらしいクアドゥラトゥス・バッススも、同じ年に補充コンスルとされたのである[12]。

ところで、エメサ、コンマゲネ、ユダヤなどの属国王家は、複雑な婚姻関係により古くから深く結びついていた[13]。コン

マゲネ王アンティオコス四世は、王国の併合後ウェスパシアヌス帝に厚遇されたのであるが、その子孫は、コンスルに達したのであった。

しただけでなく、[14] おそらくドミティアヌス帝期までには、前述のクアドゥラトゥスら中央へ進出した家系と婚姻関係を結び、また、属州の現地上層家系とも結びついていた。[15] つまり、ウェスパシアヌス帝の属国併合は、属国王家諸家系をローマ帝国支配層に吸収することにもなった。それが属州の上層家系のさらなる中央進出を容易にしたのは想像に難くない。

ウェスパシアヌス帝の帝国東部再編は、属州上層家系や属国王家を中央政界に取り込む契機となったのである。先行研究では、ドミティアヌス帝期の東部出身コンスル出現と元老院議員身分内の東部属州出身者急増を重視し、ドミティアヌス帝期を画期と考えたのであるが、[16] 実は、これまで述べてきたようにウェスパシアヌス帝の帝国東部再編こそが画期であり、ローマ帝国におけるそれまでの帝国東部の位置づけを変革したのである。ドミティアヌス帝期はその延長線上にあったのであった。

① 以後、六九年内乱でウェスパシアヌスを支援した人々をフラウィウス派と呼ぶ。彼らの中核は、東部属州の軍団長および東部属州の総督たちであった。拙稿「ウェスパシアヌス帝の統治政策とマルケッルスの死」『西洋古典学研究』六六、一九九八年、九八―一〇九頁参照。

② パンサの経歴は、彼の経歴を記した碑文の復元が困難なため、諸説ある。本稿は、S. Mitchell, op.cit., pp. 154-156 を基にした。

③ B. Rémy, *Les Carrières senatoriales dans les provinces romaines d'Anatolie au Haut-empire*, Paris, 1989, p. 341, no. 298.（以下、B. Rémy, Carrières と略す。）

④ 本稿では、帝が七三、四年に新たにパトリキ貴族へ上昇させた者を新パトリキ、ウェスパシアヌス帝期より前からのパトリキを旧パトリキと呼ぶ。ウェスパシアヌス帝が属州統治に用いたパトリキの大半は新パトリキであった。前掲拙稿、一〇三―一〇四頁参照。

⑤ 前掲拙稿、一〇六―一〇七頁参照。

⑥ W. Eck, Jahres- und Provinzialfasten der senatorischen Statthalter von 69/70 bis 138/139, *Chiron*, 12, 1982, p. 221; R. Syme, Antonius Saturninus, *JRS*, 68, 1978, pp. 12-21.

⑦ M. Torelli, The cursus honorum of M. Hirrius Fronto Neratius Pansa, *JRS*, 58, 1968, p. 175. は、彼らがもともとユダヤやシリアの軍団長であったことから、ウェスパシアヌス帝は東部属州の専門家を養成しようとしたと考えるが、腹心であった事実を見逃している。ルキリウス・バッススなど、ユダヤ総督になるまでは東部と何の関係もない経歴を経た者もおり、帝の意図を単なる専門家養成とは見なせない。

⑧ 前述のポレマエアヌス（在職 七八―七九年）、B. Rémy, Carrières, no. 24、L・ユリウス・プロクレイアヌス（七九―八一年）,

ibid., no. 204、前述のクアドゥラトゥス（八二―八三年）, ibid., no. 49. プロクレイアヌスが新パトリキである。

⑨ ex. H. Halfmann, *Die Senatoren aus dem östlichen Teil des Imperium Romanum bis zum Ende des 2. Jh. n. Chr.*, Göttingen, 1979, p. 78; R. Syme, *Some Arval Brethren*, Oxford, 1980, p. 91.

⑩ ティトゥス帝期のT・ユニウス・モンタヌスが既知の東部属州出身の初のコンスルであるが、彼の前後には全く東部属州出身のコンスルがおらず、また彼の経歴も不明な点が多い。また、高齢でコンスルに達したらしく、先行研究ではそれほど重視されていない。

⑪ 前掲拙稿、一〇三―一〇七頁参照。

⑫ H. Halfmann, op.cit., p. 120. クアドゥラトゥス・バッススの父は、ウェスパシアヌス帝の時に元老院議員となったC・ユリウス・クアドゥラトゥスである可能性が高い。なお、トラヤヌス家とクアドゥラトゥス家の結びつきは、六九年が最初かもしれない。

⑬ エメサ、小アルメニア、コンマゲネの王家は、何代にもわたる姻戚関係で結びついていた。cf. R. D. Sullivan, The Dynasty of Emesa, *ANRW*, II-8, 1977, pp.198-219; Id., The Dynasty of Commagene, *ANRW*, II-8, 1977, pp. 732-798.

⑭ アンティオコス四世の息子エピファネスは、Ti・クラウディウス・バルビッルス（ネロ帝期のエジプト総督）の娘と結婚し、その子アンティオクス・フィロパッポスは一〇九年のコンスル。ex. D. Braund, *Rome and the Friendly King*, London, 1984, p. 178, n. 79.

⑮ IGRR, 3, 173＝OGIS, 544. cf. R.D. Sullivan, Papyri Reflecting the Eastern Dynastic Network, *ANRW*, II. 8, 1977, pp. 935-938.

⑯ J. Devreker, Les orientaux au Sénat romain d'Auguste a Trajan, *Latomus*, 41, 1982, pp. 509-511. 南川高志『ローマ皇帝とその時代』創文社、一九九五年、一五四頁。

おわりに

ウェスパシアヌス帝期には東方辺境が著しい変化を被り、ローマ帝国の影響力はコーカサス地方にまで及んでいた。だが、これは、先行研究が考えたような、アルメニア・パルティアに対する領土拡大や、単なる辺境防衛、といった性質のものではなく、帝国東部全体の再編の副産物であった。この再編により、小アジア、シリアからは属国がほぼ消滅し、六つの属州に整理・統合された。六九年までは属国や自治州が散在し、地域として統一されているとは言いがたかった帝国東部は、ウェスパシアヌス帝によって初めてまとまった形を与えられ、「東方属州」として帝国の核の一つを形成することとなったのである。先行研究が言うように、六九年の内乱でウェスパシアヌス帝を支持した人々の大半がイタリアや西

方属州の出身者であり、フラウィウス朝開始によって第一に恩恵を受け、新たに二世紀の帝国有力家系の祖となったのは確かである。だが、彼らの中核は六九年内乱では帝国東部で勤務していた元老院議員であり、ウェスパシアヌス帝期にも東部再編に大きな役割を果たしたことを忘れるべきではない。彼らの台頭は、彼らと結びついた東部出身者の中央政界進出をも促進することとなり、五賢帝期には東部属州出身者は、イタリアや西部属州出身者と並んで、ローマ帝国支配層を形成したのである。このように、ウェスパシアヌス帝の東方政策は、疲弊した帝国の再建を可能にしたばかりでなく、その後のローマ帝国の政治、社会に大きなインパクトを与え、帝国を二世紀の最盛へと導く礎となったのである。

（京都大学研修員　　）

governor of Ifrīqīya.

The third revolt was an uprising in Tūnus by Ifrīqi Arabs of Egyptian origin (descendants of the Arab conquerors of Ifrīqīya) who had previously lost their land and prerogatives to the Khurāsānis. It was led by Khuraysh (Ḥamdīs), whose father-in-law, Ḥasan b. Ḥarb, had led a rebellion thirty-five years previously. Ifrīqis from all over the territory flocked to Tūnus to join the revolt. They were easily defeated by the Khurāsānis, who were sent from Qayrawān by Ibrāhīm.

As time went by, the Zābi Khurāsānis became increasingly alienated by their old comrade, Ibrāhīm b. al-Aghlab, as he became increasingly autocratic, basing his power on newly recruited foreign mercenaries (Italians and Negroes). The Zābi Khurāsānis (led by 'Imrān b. Mujālid, once Ibrāhīm's confidant), Syrians (led by 'Amr b. Mu'āwiya), and Baṣrans (led by 'Āmir b. al-Mu'ammar), coalesced against Ibrāhīm, but the rebellion dissolved when Ibrāhīm offered them salaries.

This revolt was resumed and developed into the final and largest revolt by Manṣūr b. Naṣr, 'Āmir b. Nāfi', and 'Abd al-Salām b. al-Mufarraj, Khurāsāni Arab leaders and prominent landlords. The governor Ziyādatullāh, Ibrāhīm's son, bided his time, waiting for quarrels and in-fighting to create divisions among the rebels, while diverting Arab attention to the conquest of Sicily.

The Eastern Policy of the Emperor Vespasian

by

KUWAYAMA Tadafumi

The reign of Vespasian has been considered as an era of the development of the western part of the Roman Empire. But, the eastern part of the Empire is as important as the western part. For the basis of Vespasian's faction in the Civil War in A. D. 69 was in the eastern part, and during his reign, the eastern frontier of the Roman Empire was quite changed: the client kingdoms such as Commagene and Armenia Minor were incorporated into the Empire; Cappadocia was joined with Galatia and stationed by two legions. Concerning these changes, other studies have insisted that Vespasian merely intended to make a defence line. By offering reasons other than military aspects, I demonstrate the further significance

of the eastern part for the Emperor Vespasian.

In the first part of this article, the diplomacy between Rome and Parthia, the incorporation of Commagene, is examined. In Vespasian's reign, this kingdom was no longer a buffer state, but completely subordinated to Rome, so we can regard the incorporation as a domestic administration. Rome just managed to secure control of the west side of the Euphrates, trying not to arouse Parthia. It was not necessary for Vespasian to make a defence line so as to prepare for Parthia's attack.

In the second part, I examine the reorganization of eastern Asia Minor, namely, the unification of Cappadocia and Galatia together with Armenia Minor. Most important is the fact that Vespasian did not send a legion to Armenia Minor until A. D. 75. That is to say, the incorporation of Armenia Minor was not done for a military purpose. Instead, I stress two reasons about the reorganization of this area. The first is the disturbance of the south-east coast of the Black Sea: this area was annexed only in A. D. 64 and a rebellion against Roman rule happened in 69; legions were necessary to maintain order. The second is the economic importance of Satala in Armenia Minor. It was located on the crossroads of two trade routes, one from the Black Sea, the other from Armenia Major. The incorporation of Armenia Minor seemed to help Roman finances. The same reason can apply to that of Commagene, which was famous for its wealth. In the reign of Vespasian, the imperial economy was impoverished by the Civil War, so its reconstruction was his urgent duty. He exploited the eastern part of the empire as the resource of reconstruction, which had no damages from the war. The eastern frontier was not excluded. Thus, Vespasian's eastern policy must be regarded not only as a military policy, but also as an economical one.

Lastly, I also show the importance of the eastern provinces from the point of human resources. First, the reorganization of the eastern part might require much more cooperation with the eastern provincials. The senators from the east such as the adlecti of Vespasian were mainly employed. This policy resulted in the dramatic increase of senators from the east in the reign of Domitian. Secondly, the main supporters of Vespasian in the Civil War became powerful following his reign, replacing the previously powerful senators from the Julio-Claudian Dynasty. Most of these rising senators were engaged in the reorganization of the eastern provinces as governors, and were connencted with some senators from the east by patronage. It probably contributed to the advance of the status of the senators from the east. The most distinct example is the connection between the family of Trajan and that of Quadratus. As we

have seen above, Vespasian's eastern policy not only reconstructed the imperial finances, but laid the foundations of the Roman Empire in the second century.

Study on the Land Tax System under the Wei 魏 Dynasty (220-265 A. D.)

——With Refence to the Land Tax Rate——

by

Zhang Xuefeng

Concerning the new tax system established by Cao Cao (曹操) in 204 A.D., recent studies have mainly focused on the household tax system (戸調制) for its epoch-making character. On the other hand, the land tax system has rarely received sufficient notice, and it is almost taken for granted that the tax rate was actually 4 sheng (升) per mu (畝) as described in several sources. This superficial presumption has biased not only the realization of the historical nature of the new tax system, but also that of agricultural production and the tax system of former and later periods. This paper questions the tax rate of 4 sheng per mu considering the resemblance between the chinese characters sheng (升) and dou (斗) in shape. It basically agrees with some recent scholars on the rate of 4 dou per mu, and goes further to explore the historical significance of the new tax system. It is summarized as follows:

This paper begins with a review of the debate on the validity of the tax rate of 4 sheng. It points out that this question should be discussed in a broad historical context, and hence turns to the typical features and problems of the tax system under the Han (漢) dynasty. As recent studies have revealed, the tax system of the Han dynasty is basically composed of a light land tax with the low rate of 1/30, and a head tax which is levied in cash. The former favoured large landowners while scarcely benefiting peasants. Moreover, the latter oppressed peasants who had no cash income. Thus both aspects of this tax system led to the concentration of landholding by large landowners and the ruin of peasants. From the middle of the Later Han dynasty onwards, the social problems caused by the tax system became more and more evident, and the officials of the intellectual